

【紅葉狩】もみぢがり

野山に紅葉を眺めに出かけることを紅葉狩といいます。紅葉見と同義ですが、紅葉狩の方がより深い山野に分け入るような語感があると思います。古語で落葉樹の葉が色づくことの動詞を「もみつ」といいます。これが連用形名詞「もみぢ」となったのです。万葉集では「黄葉」、平安時代からは主に「紅葉」の字が使われています。「狩」は狩猟採取の意味はなく「鹿狩」「松茸狩」とは異なった用法となります。

落葉樹の葉が黄色くなるのは葉に含まれる緑色のクロロフィルが分解され、キサントフィルなどの黄色い色素が残るため、赤くなるのはクロロフィル分解後、アントシアンと呼ばれる赤い色素が細胞液の中に作られるからです。

昔の人は「もみつ」の原因をどう考えていたのでしょうか。

・白露の色はひとつをいかにして秋の木の葉をちぢに染むらむ 『古今集』藤原敏行

〔白一色の露なのにどうやって木の葉を様々な色に染めるのであろうか〕

『古今集』ではこの歌の問いかけに、壬生忠岑、紀貫之などが歌により答えています。いずれの古人も時雨・露・霜が葉を染めるのだと考えていたようです。時雨や露が紅葉の縁語なのはこうした因縁よるのです。

謡曲『紅葉狩』は「時雨を急ぐ紅葉狩 時雨を急ぐ紅葉狩 深き山路を尋ねむ」から始まります。鹿狩に戸隠山へ出かけた平維茂は紅葉狩の宴を楽しむ女たち一行に会います。酒宴に誘われ加わった維茂一行はいつの間にか眠りに落ちてしまいました。女たちは実は鬼神であり維茂らに危険が迫ってきました。夢うつつの中で石清水八幡の末社の神が現れ、維茂に太刀を授けます。目覚めた維茂はその太刀で鬼神を退治するという物語です。

この曲の舞台となった戸隠には私の好きなキャンプ場があります。山、池、牧場、神社、蕎麦、そして紅葉が最高にすばらしい所ですよ。

・林間に酒を煖めて紅葉を焼く 石上に詩を題して緑苔を掃ふ

〔林の中に入り紅葉を焚いて酒を温め、石についた苔を払って詩を書き留める〕

白居易の「王十八の山に帰るを送り仙遊寺に寄題す」という七言律詩の頸聯です。『和漢朗詠集』『平家物語』などにも引かれ知られた一聯です。待合に掛かる色紙などによく見かけますよね。紅葉を焚いて温める酒を紅葉酒といいます。ふすべ茶とともに一度味わってみたい酒ですね。